text:TSUUZAKI MUTSUMI photo:NAKAGAWA TADAAKI artdirection:TANIMOTO TAKASHI

通崎睦美（つうざきむつみ） マリンバ奏者　京都市生まれ。5歳よりマリンバを始め1992年京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。1991年のデビューコンサート以降、自身でコンサートをプロデュースし、その新しい取り組みで数々の賞も受賞。近年はアンティーク着物の着こなしが話題となり、着物ブランドの企画やエッセイストとしても活躍。5月20日より、東京目白の和敬塾（旧細川侯爵邸）にて「通崎睦美〈選〉展～通崎好み」開催（220頁参照）。

通崎睦美の KYOTO アート散歩 3

松原通・末富

Matubara-st. Suetomi

京都を歩いてみれば、いわゆる名所旧跡でなくても、そこかしこで京都の歴史や文化を感じとることが出来る。碁盤の目のように通る一本ずつの通りを、まっすぐてくてくと散歩してみるのも楽しいかもしれない。

例えば「松原通」。松原通は、東、清水寺からスタートし、全長約5・2キロにわたって西へ延びる。

今は、「松原通」があり2本南に「五条通」があるが、その昔は「松原通」が「五条通」と呼ばれた。1590年、豊臣秀吉が東山に大仏殿を造営した際、参詣人に都合のよいよう、その当時の「五条通（現松原通）」の鴨川にかかっていた「五条大橋」を、橋の名前はそのままで「六条坊門小路」の鴨川に移した。そのことで、橋の名にあわせて「六条坊門小路」が「五条大橋」のある「五条通」という通り名に変わってしまった。だから、「京の五条の橋の上～」と歌われる牛若丸と弁慶の出会いは、正確に言うと、旧五条通、現在の松原通での出来事ということになる。

では、「六条坊門小路」に名前をとって代わられた「松原通」の名前はどこからきたか。

清水寺からまっすぐ西へ、鴨川を渡り、河原町通を過ぎ、烏丸通を越えたところに、鎌倉時代の歌人藤原俊成にゆかりのある「新玉津島神社」がある。ここが、応仁の乱で焼失した際、歌道の冷泉家が再建し参道に松を植えた。この並木の松原からそうよばれるようになったそうだ。ある時期、この神社の神官を国学者北村季吟が務め、季吟の弟子となった松尾芭蕉がここで俳諧の道を究めたともいわれている。

この神社の傍に、お茶人さんの間でも評判が高い、京菓子司「末富」がある。ご主人の山口富藏さんは、京菓子から連想される古典的芸能にとどまらず、音楽や美術など現代のアートに造詣が深いことでも知られる。そしてそれらに触発されて生まれたお菓子の数々は、遊び心に溢れ、見ているだけでも楽しい。

ここのお菓子は、今流行の「甘さ抑えめ」ではない。「甘い」という美味しさをとことん追求した「味」がある。「悪い工夫はしない」とおっしゃるご主人の考えから生まれる、伝統と革新の絶妙なバランスが魅力だ。

最近は、なにかにつけ平等を言うようになり、男だからこそ、女だからこそ、ということも少なくなってきたが、5月5日は男の子の節句。鯉のぼりや兜はださなくとも、節句にちなんだお菓子をいただきながら、子供の成長を祝うのもよいかもしれない。

右頁・写真上／「鯉のぼり」（要予約）「紙兜」4月の終わりから節句のころまで販売される定番。節句祝いのお遣い物として用いられることも多い。　写真下左／「華ふうせん」998円●京菓子司 末富 ☎075-351-0808
写真下右／五條天神社で販売されている手拭 400円
左頁・写真／牛若丸と弁慶が出会ったとされる「五條天神社」。下京区西洞院通松原角。「末富」から歩いてすぐ。　右／銘仙着物、桃子の帯　左／銘仙着物、長襦袢。すべて昭和初期。通崎コレクション

撮影／中川忠明
AD／谷本天志
着つけ／山崎真紀
ヘア・メイク／谷口裕子
モデル／原田圭太　今田香織